第4講：2「お言葉のある毎に」

おやさと研究所教授
幡鎌　一弘　*Kazuhiro Hatakama*

この逸話は、天保9年10月、立教時の緊張感あふれる様子をよく示しており、当時まだ子供であったおまさ・おきみ（おはる）の実体験が、その子孫の中山慶太郎・梶本宗太郎に伝わっていたものである。講演当日は、この逸話を通して、『教祖伝』と『逸話篇』の関係について触れてみた。

この逸話は、『教祖伝』の編さん過程の草案第4稿で初めて本文に記された。しかし、第14稿で註に回され、第17稿で本文になり、第18稿(ここから稿案になる)で註に移るというように、位置づけが変わった。第21稿では、出典として中山・梶本両名の名前が記されて体裁が整えられたが、第23稿、すなわち『教祖伝』では、結局採用されなかった（この変遷について、当日のレジュメの記載を、上記の通りに修正する）。いわば、『教祖伝』と『逸話篇』のボーダーラインにあったものといってよい。

周知のとおり、『教祖伝』と『逸話篇』は、密接に関係する。もともとは、『教祖伝』の中の一つか二つの章に逸話を入れる予定だったが、2代真柱の「旬を改めてもっとたくさん集め、一巻の本にして出せ」との指示により、編さん中の教祖伝から削除されたという経緯があった（上田嘉成「教祖の逸話篇等について」『みちのとも』昭和48年12月号）。

逸話のまとめられていた「ひながたの親」の章が削除されたのは、第18稿（昭和30年10月26日）である。2代真柱の指示は、第17稿（昭和30年8月26日）が出た後の、同年9月頃ということになる。『教祖伝』が上梓される1年前で、草案から稿案へと名称が変わり、編さんが煮詰まってからの方針変更である。

この段階で、「ひながたの親」の章が削除された理由は何だろうか。たしかに、根拠を厳密に検討し、より充実した逸話を掲載するには、時間が不足していただろう。とはいえ、「『稿本天理教教祖伝』の成立」（『語られた教祖』法蔵館、2012年）において、『教祖伝』編さん過程での叙述の変化をたどった経験をふまえると、『教祖伝』を教義として示す上での要請だったのではないかと考えられる。

『逸話篇』の序文にあるように、『教祖伝』では「教祖の理」を明らかにするという点に重点が置かれていた。一方『逸話篇』に残されたような教祖の姿は、教理・信仰実践から教祖の好きな食べ物や口ずさんでいた歌など、ずいぶんと幅がある。それは、第16稿に掲載されていた逸話（右表）からもうかがえることである。教祖との接し方は、それぞれの立場によって異なっており、そこで語られる教祖の姿は、教祖と接した人、あるいは回数だけあるといってよいからである。よって『教祖伝』では、「月日のやしろ」としての教祖の理を第一に位置づけ、「ひながたの親」に深くかかわる教祖の逸話は、「月日のやしろ」の骨格がぶれないよう、限定したと推測される。削除された章の名前が「ひながたの親」だったということが、象徴的にそれを示していると思われる。

なお、参考資料として、稿案に記載されていた逸話を以下に掲載する（煩雑なため、レジュメの内容を一部削除した）。『逸話篇』の番号とタイトルを用い、『逸話篇』に引用されなかったものは頭注を利用し、典拠と、若干の注記を加えた。

第16稿第8章掲載の逸話

逸話篇番号	タイトル（頭注）	典拠／注記
28	道は下から	『おもかげ』。／原文にあった「学者金持ちあとまわし」は削除。
30	一粒万倍	昭和30年1月14日清水由松談（本席に直接聞いた話である）。／
29	三つの宝	昭和30年1月14日清水由松談（上記とは別の時の話だと本席から聞いた）。／註に記載は無いが『おもかげ』に掲載されている。
60	金米糖の御供	『おもかげ』、「こ」（四・六・八服はわたさなかった）。「梶本宗太郎覚書」。／
37	神妙に働いて下されますなあ	桝井おさめ談（「梶本宗太郎覚書」）。／
173	皆、吉い日やで	高井直吉談（「梶本宗太郎覚書」）、上田嘉成（異説を記載）。／『おもかげ』増補版に採用。『逸話篇』では「初まりは一である」の部分を削除。
44	雪の日	昭和29年9月29日増井常信提出。三安堵説明（杉本重雄、17稿で宮堂に変更）。／註に記載はないが『おもかげ』に掲載。
102	私が見舞いに	『おもかげ』。昭和30年1月14日、昭和30年7月7日杉本重雄。／『逸話篇』では打ち分け場所としたこと追記。
107	クサはむさいもの	『おもかげ』。／
—	（女囚の改心）	『おもかげ』（増補版に際して削除された逸話）。／『逸話篇』に不採用。
93	八町四方	『おもかげ』。「こ」。「おさしづ」明治27年11月17日、同明治26年2月6日。／原文にあった「八棟八商売」削除。
119	遠方から子供が	『おもかげ』。／
	（惜しみの餅）	昭和30年1月14日梶本宗太郎談。／惜しいけどあげようという餅は召しあがられなかったという逸話。『逸話篇』に不採用。
174	そっちで力をゆるめたら	『おもかげ』。／
159	神一条の屋敷	『おもかげ』。／
190	この道は	『おもかげ』。／
135	皆丸い心で	『おもかげ』。田中喜久男・小林一麿などにより葡萄が先から熟すかの検証あり。／
—	かったいの霊救	『おもかげ』（業果たし、増補版で削除された逸話）。／
—	前生のさんげ	昭和30年1月14日清水由松談。手癖の悪い子は親の前生のいんねんとする逸話。／『逸話篇』に不採用。
137	言葉一つ	桝井伊三郎談（「梶本宗太郎覚書」）、昭和30年7月3日桝井孝四郎談。／
193	早よう一人で	山澤ひさ談（「梶本宗太郎覚書」）。／
142	狭いのが楽しみ	『本部員講話集　下』（深谷源次郎）。／『おもかげ』増補版に採用。
143	子供可愛い	『本部員講話集　下』（深谷源次郎）／
—	（気長い心）	産婆おなか談（「梶本宗太郎覚書」）。／教祖は67歳から神の世帯をしたという逸話。『逸話篇』に不採用。
—	（心の出直し）	「梶本宗太郎覚書」。／心の出直しをしたら身上の出直しをたすけるという逸話。『逸話篇』に不採用。
181	教祖の茶碗	梶本楢治郎聞書（『復元』第1号）。／出典は正確には梶本楢治郎「教祖様の思ひ出」。
168	船遊び	山澤ひさ談（「梶本宗太郎覚書」）。／『おもかげ』増補版に採用。

［注］「梶本宗太郎覚書」とは梶本宗太郎「教祖様のお話」（『復元』22号、1954年）。『おもかげ』は『おやさまのおもかげ（上）』。「こ」はこふき委員会の略か。注記には、『逸話篇』に不掲載分の逸話の概要などを記した。